

榎藤君を呼んでくれ

(藤井君！君が昭和十九年にこの世を去るまで歩いた五十余年の足跡は、まさに日本（そくせき）の音楽を創（つく）っていいこうとする人生だった。)

大正元（たいしょうげん）年（一九一二年）、藤井君と僕は、ともに東京音楽学校（現在の東京藝術大学）に入学した。その頃の彼は、僕以外に積極的に友達を作ろうとはせずに、いつも僕と行動を共にしていた。彼は常に何かを考えている様子だったので、多分、頭の中は音楽のことではいっぱいなんだろうなと僕は思っていた。しかし体が弱かった彼は、その後体調をくずし、学校を休むようになってしまった。僕は看病しながら、何とか元気になるってくれと願っていた。ある日のことだった。

「一年間休学して、実家がある呉で静養する。」
と、藤井君が僕に告げた。心の中ではとてもさびしかったけれど、彼の体調のことを考えるとそれも仕方ないと思った。

藤井君は休学のため僕より一年遅れて卒業したが、彼の音楽に対する情熱は変わっていなかった。その後、福岡県で音楽教師になった。僕自身も福岡県の教師として働いていたので、久しぶりに彼に会いたいと思いついてみた。行ってみるとすでに結婚し、元氣そうに暮らしている彼の様子を見て、僕はほっとした。

それからは学校が近いこともあって、土曜日は彼の家に泊まり込み、彼の作った曲を聞いて感動したり、音楽について心ゆくまで語り合ったりした。僕は土曜日が待ち遠しくてたまらなかった。



僕たちはその後、福岡を離れ大阪で音楽活動を始めた。藤井君は常に、「日本のものを書かなければならない。西洋のまねばかりしてはだめだ。」
と言いつつ、熱心に研究をしていた。そんな彼を僕は尊敬し、いつか偉大な作曲家になると確信していた。そのためには僕が「藤井清水の曲」を世の中に知らしめなければならぬ。声楽家であった僕はそれをかなえようと、彼の曲を一生けん命練習して歌ったのだが、音楽のことになると厳しい藤井君は自分の思い通りの演奏になるまで承知しなかった。けれど、僕は不思議と練習がつらいと感じなかった。

それから作詞家の野口雨情氏と三人で全国公演を行うことになった。野口氏が作詞し、藤井君が曲を付け、僕が歌った。それぞれの持ち味が出て、公演はどこでも大好評だった。

活動拠点^{きょてん}を東京に移してからも、藤井君はわき目もふらず作曲し、力作、大作を生み続けた。そして、彼の美しいメロディは外国からも高く評価されるようになっていった。僕の願い通りになったのだ。

一方、三人そろっての活動は、それぞれが自分の道を歩くようになったため、次第に少なくなっていくた。

時は過ぎ、病気が原因で心臓を悪くしてしまった僕は病院生活が続いた。その上、戦争も重なり、藤井君と会うことも遠のいていった。

ある日彼が静養中の僕を見舞ってくれた。

「早く治れよ。君の心臓はあんなに強かったじゃないか。もう少し辛抱^{しんぼう}すれば、歌えるようになるよ。そうじゃなきゃ、僕まで共倒^{ともだお}れだ。」

彼のその一言が、気弱^{きよわ}になつていた僕にとって、どれほど勇気を与えてくれたか。

しかし、悲劇^{ひげき}は突然やってきた。昭和十九（一九四四）年三月二十四日。藤井君は真つ暗な夜道で足を踏み外^{はず}し、深い溝^{みぞ}に転落してしまった。なんとか家までたどり着いたが、腹部の痛みを朝まで我慢^{がまん}していたらしい。翌朝、やっと車で病院に運ばれたが、すでに手遅れの状態で、手術をする前に息を引き取ってしまった。

けがの知らせを聞いた僕は、病床から藤井君の家に急いだけれど、一足違^{ちが}いで彼に会うことができなかった。病院からは手術を受ければ治ると聞いて安心して、家に帰っていた僕に、彼の死の知らせが届いたのはその日の夕方だった。

僕はぼう然とその場にたたずんだ。

「権藤君を呼んでくれないか。」

「権藤君はまだ来ないか。」

すでに死期が迫^{せま}っているのを悟った藤井君が、何度も僕の名前を呼んでいたと聞いた。その時の彼の気持ちを考えると言葉も出なかった。



けれども、彼は今も僕の心の中に生き続けている。